



探究心は未来の光になる

天羽 康之

北里大学医学部皮膚科主任教授

2019年11月に中華人民共和国湖北省武漢市付近で新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)感染症が確認されてから1年以上が経過しました。この感染症は全世界に大きな影響を与え、感染患者の診療はもちろん、ソーシャルディスタンスやテレワークをはじめとした世界の生活環境さえも一変させました。また、感染を恐れて受診を控える患者が増加し、多くの病院で患者数が減少しています。医療者の社会環境の変化も大きく、皆さんも多くの意見があるとは思いますがたいへん厳しい状況です。いつまでこの感染症が続くかは断言できませんが、たぶん短くても数年以上影響が残るでしょう。しかしながら、厳しい環境に不平をいっていても始まらないので、あたり前ですが私たちは環境に合わせて変化していくしか生き残る方法はないのだと思います。

その中で私はいま、医療者として何をすべきかを考えますと、臨床の継続はもちろんのこととして、やはり、このようなときこそ、国内、できれば国際的に評価される仕事をして、アピールの努力を続けるしかない、あたり前ではありますが強く感じるようになっています。

私は現在、皮膚の幹細胞の研究を中心に、少しでも国際的に評価されるような研究をしたいと努力を続けています。研究というと抵抗感を感じる方も多いと思いますが、研究といってもむずかしいもの

でなくてもよいですし、基礎研究でも臨床研究でもよいと思います。いま行っている治療がほかの治療よりもよいかどうかを考えて診療するだけでも違います。研究(研究というより探究といったほうがよいかもしれません)は地道で目立たないところもありますが、その心をなくしてしまうと、いまの日本の医療の現状をみればわかるように、医療者に未来の光はなくなってしまうように思います。

「医学部は才能の墓場」という先生もおられます。確かに毎日の診療に才能のすべてを生かしきれない方も少なくないと思います。私は日本の医療の危機である現状を打破するために、日々のストレスの中で診療を続けることに忙殺されている若い先生方が、その素晴らしい才能を生かして、国内、できれば国際的に評価されるような研究的思考(探究心)をもって、どんな環境でも迷うことなく毎日を努力してくれることを願っています。

皮膚科は臨床と研究が密接につながっている学問なので、臨床における探究心を満たすのにとっても恵まれた科だと思います。皆さんの将来が明るくなることを期待し、そのために私も微力を尽くしたいと思っています。